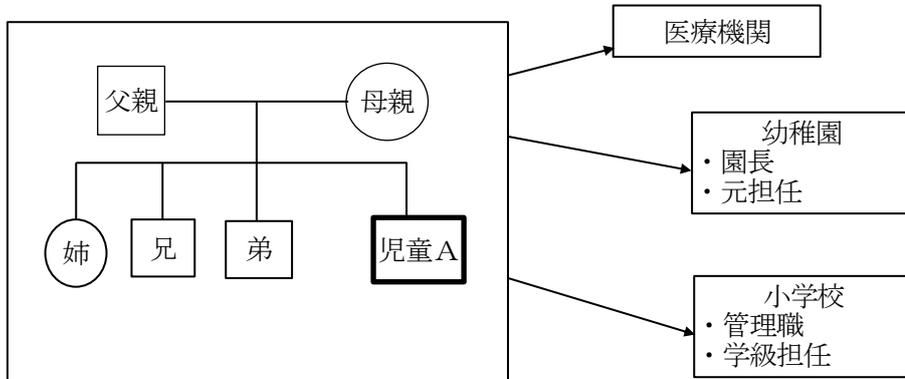
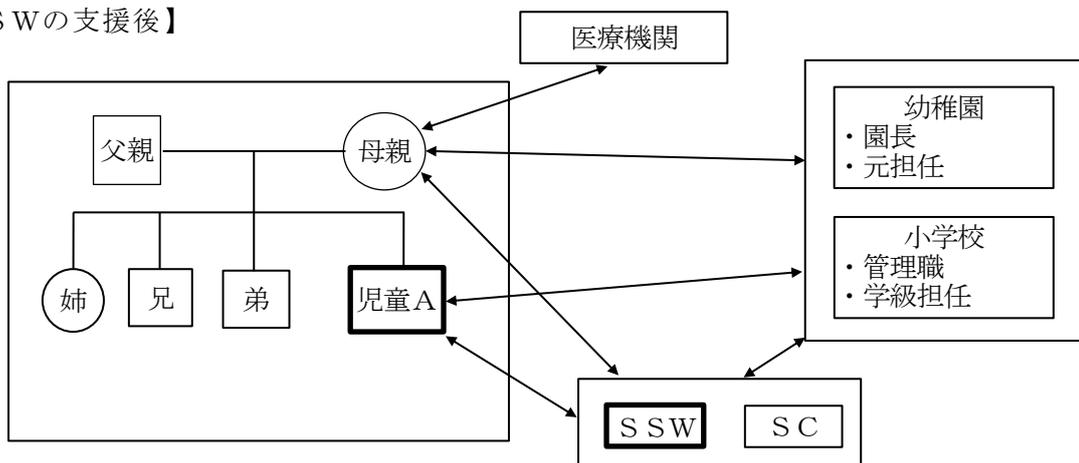


スクールカウンセラーとの連携した支援により、学校生活への不安が解消されたケース

【 S S W の支援前 】



【 S S W の支援後 】



1 気になる状況

- 児童Aは、小学校に入学後も、幼稚園の時の同級生から嫌がらせを受けていた。
- 児童Aは、家庭においても本音を言わない様子が見られる。
- 児童Aの母親は、児童Aの養育に関わり、困り感をもっている。
- 児童Aは、ストレスが原因と思われる体調不良（かゆみ）を訴えてきたことから、母親は、早期に改善するため、SSWに依頼した。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 児童Aは、父親、母親、姉、兄、弟の6人で暮らしている。
- 児童Aは、父親に対して甘えが強いが、母親との関わりについては、遠慮がちな様子が見られる。
- 児童Aは、人見知りの傾向が見られるものの、会う回数を重ねることで、相手に慣れ自分から関わりを求めることができる。
- 児童Aは、寂しがりやで、些細なことで落ち込み、泣きながら下校する事が多い。

(2) 学校との情報共有の状況

- 児童Aは、幼稚園及び母親の要望で、加害児童とは別の学級に在籍しているが、下校時の嫌がらせは改善されていない。
- 児童Aが在籍する小学校では、関係者（児童A、加害児童、学級担任）で話合いの機会を設定したが、解決に至っていない。
- 母親からSSWに、小学校には、SSWに相談している事を伝えないでほしいという強い要望があることから、情報を十分に共有することができていない。今後の状況によって、情報を共有する必要があった。

3 ケース会議の状況

- 参加者
 - ・ SC、SSW、当該小学校管理職
- 内容
 - ・ 保護者からの要望を踏まえた児童Aへの支援について
 - ・ 児童Aについての状況の整理と支援方法について

4 プランニング

- 学校
 - ・ 児童Aの情報については在籍小学校には伝えてはいないが、今後の状況によっては、当該小学校、教育委員会と連携する。
- SSW、SC
 - ・ 母親と児童Aとの面談を定期的実施し、母親及び児童Aの思いや悩みを把握するとともに、信頼関係を築き、それぞれが抱える不安の解消に努める。
 - ・ SSWとSCが課題解決のために役割（SC：心理面での支援、SSW：環境面での支援）を分担し、互いに情報交換しながら改善を図る。

5 社会資源の活用状況

- SSW、SCが所属する中学校の相談室を活用し、リラックスできる環境（面談や遊べる場所）を提供するとともに、児童Aや保護者との信頼関係の構築に努めた。
- 町内のボランティアサークルに児童Aと母親がともに参加することで、対人面の関わりを増やし、成長する機会を広げた。
- 当該生徒の下校時、町内の学童保育を活用し、加害児童との接触場面を減らす工夫をした。
- 医療機関での受診を行い、児童Aの実態の把握や経過観察を行うとともに、支援の方法についてアドバイスを受けた。

6 当該児童の変容（成果と課題）**<成果>**

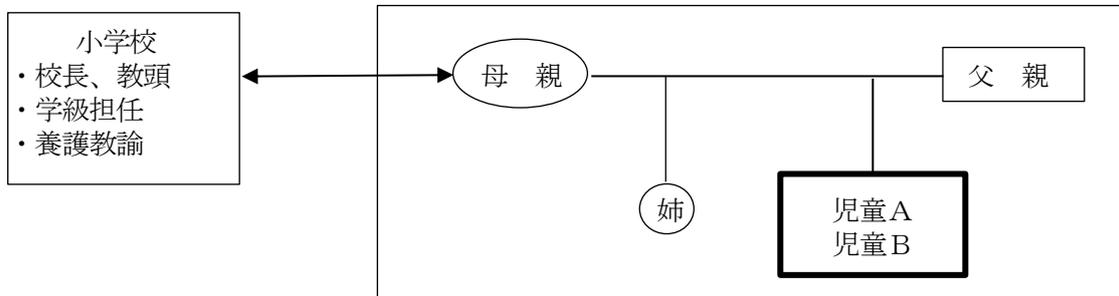
- SSWとSCが連携し、児童A及び母親との面談を、一定期間に複数回実施したことにより、児童Aと保護者の不安が少しずつ解消された。
- 相談室を活用した交流により、児童Aはリフレッシュでき、前向きな気持ちで生活を送ることにつながった。
- 母親は、児童Aが自信を取り戻した様子から、子育てに対する意欲をもつことができた。

<課題>

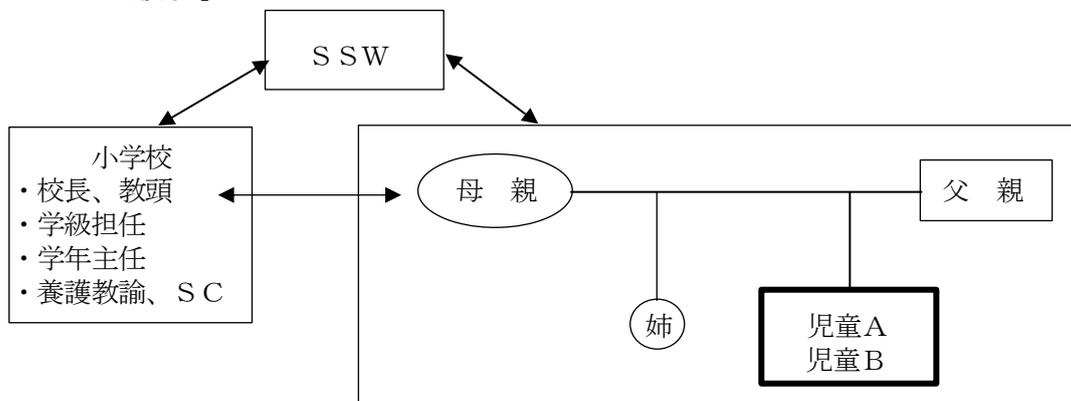
- 嫌がらせの解決に向けて、家庭、学校、教育委員会の関係機関が連携し、情報共有及び連携した指導に取り組んでいく必要がある。

新学年からの不登校傾向に組織対応し長期不登校を防いだケース

【 S S Wの支援前】



【 S S Wの支援後】



1 気になる状況

- 校長が S S Wに相談した事案である。
- 新学年になってから小学生の児童 A・児童 Bが体調不良を訴え登校を渋るようになった。
- 始業式から数日は登校し学級で過ごしていたが、高校生の姉の体調不良をきっかけに欠席が始まり、現在は保護者が送迎しているが、二人とも保健室で過ごすことが多い。
- 高校生の姉は体調不良で通院し、服薬している。
- 家庭は落ち着いており、家庭生活の乱れや家庭内の不和等はない。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 父親、母親、姉（高校生）、児童 A、児童 Bの 5 人家族である。
- 両親は共働きである。
- 児童 A・児童 Bは、新学年になってから登校を渋るようになり、保健室登校となっていた。
- S S Wと S C、教頭、学級担任、養護教諭によるケース会議を開催し、今後の対応を確認した。
- 適宜、児童 A・児童 Bへ S Cによる面談を実施した。

(2) 学校との情報共有の状況

- 学級に戻るために、児童A・児童Bの様子や家庭の状況を注意深く見守り、学級担任だけでなく、組織として支援及び指導を行う。
- SC等の関係機関と連携を密にして対応する。
- 児童A・児童B及び保護者と話し合いながら対応するとともに、医療機関と連携を図った対応が可能であることを伝える。

3 ケース会議の状況

- 教頭、学級担任、養護教諭及びSCによるケース会議において、チームで児童A・児童Bの支援を行うとともに、家庭との連携を密に行い、信頼関係の構築に努めることを確認した。
- 過度な登校刺激をせずに、教室で過ごす時間が長くなるよう対応に当たる。

4 プランニング

- 学級に戻ることを第一に考え、ケース会議を開催するなど、組織的に対応する。
- 家庭との連携を密に行い、更なる信頼関係の構築に努める。
- 学校外の関係機関等と情報を共有するとともに、連携しながら対応に当たる。

5 社会資源の活用状況

- 適宜、SCによる面談を実施するとともに、ケース会議において対応を協議している。

6 当該児童の変容（成果と課題）

<成果>

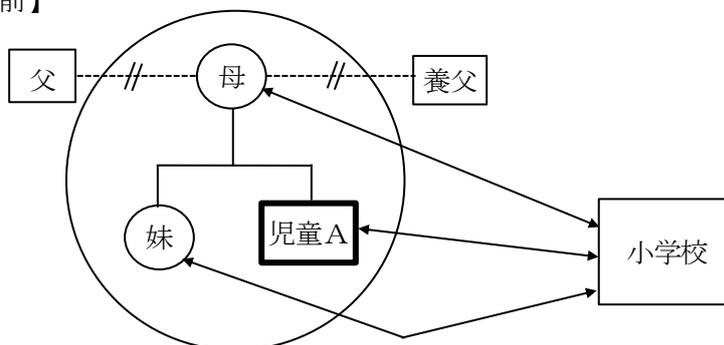
- 関係機関と連携を図るとともに、組織的に対応したことにより、児童A・児童Bは、保健室に行くことや早退することがなくなり、欠席することが少なくなった。
- 校長、教頭、学級担任、養護教諭等によるケース会議を開催し、校内連携を図り、他学年の教員等複数の目で見守ることにより、児童A・児童Bは落ち着いて学校生活を送るようになった。

<課題>

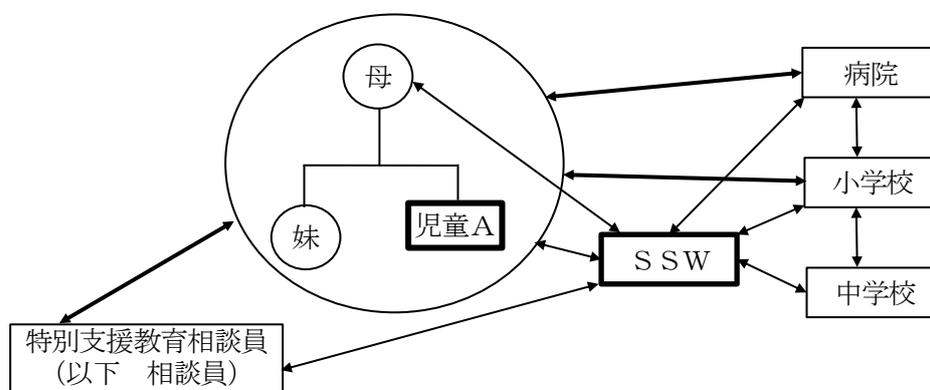
- 学校と保護者が互いに情報共有をしながら対応するとともに、心療内科等の医療機関を含めた学校外の関係機関と連携体制を構築し、協力しながら対応に当たる必要がある。

SSWが学校、医療機関、特別支援教育相談員と連携して生活改善を図ったケース

【 S S Wの支援前】



【 S S Wの支援後】



1 気になる状況

- 第5学年の児童Aは、生活リズムが乱れ、昼夜が逆転し、ゲーム依存の状況になっており、学校の授業時間（15：00頃）までは布団をかぶって寝ている。
- 幼児期は、言葉の遅れ、音への過敏さ、泣き続ける、男の人を避けるなど行動面で気になることがあった。3歳児検診では自分の名前を言うことができず、保育園では児童通所施設に相談することを勧められた。
- 母親の指示に従わず、誰とも会おうとせず「引きこもり」の状態である。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 児童Aは、実父と幼少時に別離し、7歳の時に母親の再婚相手と養子縁組を行ったが、養父のDVなどに起因する離婚と転居を経験し、精神的ダメージがあったと予想される。
- 就学時検診の結果、小学校入学時に通級指導教室（情緒障がい）に措置となったが、小学校第4学年での転出を機会に、本人の困難さが改善されたとして通級指導教室を終了した。
- 小学校第5学年時の宿泊学習では、食堂でトレイを持ったまま立ち尽くす場面もあり、集団活動や他者とのコミュニケーションに難があることが浮き彫りになり、宿泊学習明けの9月から不登校が始まり、10月から全欠席している。
- 母親は嫌がる児童Aを連れて小児科を受診し、児童Aは起立性調節障害と診断された。
- 登校を模索する母親とのやりとりは膠着状態が続き、母親は適応指導教室の通級を促し、児童Aは一度見学したが、拒否した。

3 ケース会議の状況

- 第1回校内ケース会議
【参加者】小学校（教頭、養護教諭、特別支援教育コーディネーター、学級担任
市教委（SSW）
【内 容】校内での情報の共有と今後の支援について検討した。
- 第2回校内ケース会議
【参加者】小学校（教頭、特別支援教育コーディネーター、学級担任）
市教委（相談員、SSW） 保護者（母親）
【内 容】全欠席で引きこもりになって以後、母親は、児童Aへの対応に困り、病院の児童精神科を受診し、臨床心理士のカウンセリングに繋ぐことを確認した。
- 第3回校内ケース会議
【参加者】小学校（教頭、特別支援教育コーディネーター、学級担任）
中学校（教頭、主幹教諭）
病 院（小児精神科医師、臨床心理士） 市教委（相談員、SSW）
【内 容】児童Aの状況に関して関係機関で情報共有を行い、進学に向けたきめ細かな対応を協議した。

4 プランニング

- 小学校
児童Aの障がいの特性に応じた指導や支援、環境づくり等を「枠」にとらわれずに実施する。
- 中学校
進学に向け、小学校と円滑に接続するとともに、児童Aの障がいの特性に応じた指導や支援、環境づくり等を検討する。
- 医療機関
受診とカウンセリング、投薬治療を行う。
- 特別支援教育相談員
学校及び家庭における児童Aへの適切な関わり等について助言する。
- SSW
登校しぶりへの支援を行うとともに、情報を集約したり、関係機関との情報共有や連絡調整、方針の立案と推進を行ったりする。

5 社会資源の活用状況

- 障がいの特性に応じた関わりができるよう、相談員が支援できる体制を構築した。学校における指導・支援の在り方、家庭における関わり方など、細かな助言をした。
- 医療機関（主に臨床心理士）との綿密な情報共有を行うとともに、児童Aの精神的なケアと支援を企画・推進した。

6 当該児童の変容（成果と課題）

<成果>

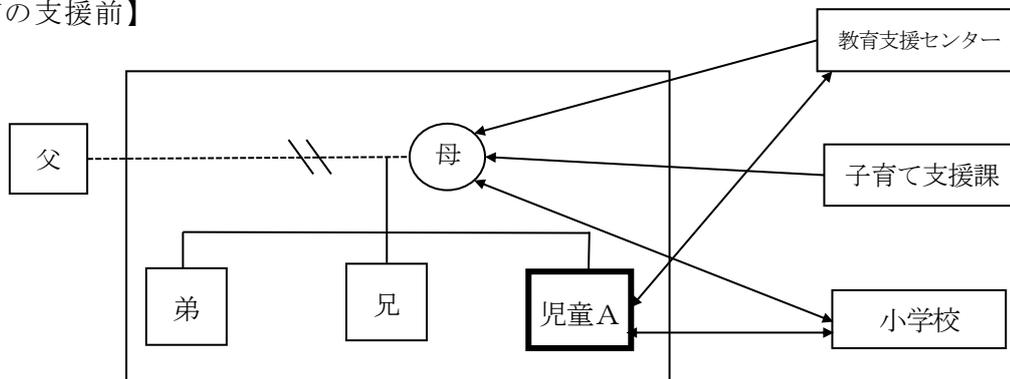
- SSWや関係機関が連携して対応したことにより、母親と児童Aが医療機関を受診するとともに、相談員の専門的な支援を受けることができるようになった。
- 教育支援センターにおいて週に一度1時間程度、学級担任と通級指導を受けることができ、学級担任と良好な関係を構築することができた。当該生徒の表情も驚くほど明るくなり、教育支援センター職員とあいさつを交わし、簡単な会話ができるようになった。

<課題>

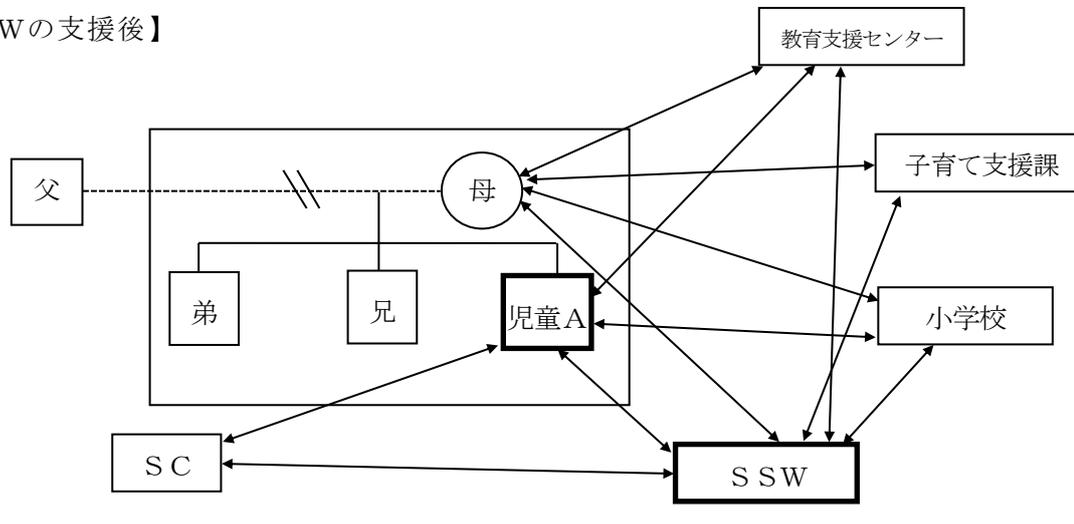
- 今年度3学期より妹の登校しぶりが始まり、兄妹で不登校状況にあることから、関係機関との連携をより一層深める必要がある。
- 教育センターにおける通級指導を行っているが、例外的な措置のため、通常の学級における特別支援教育を学校全体で推進していく必要がある。
- 中学校卒業後の高校進学、高校卒業後の就労等、児童Aの支援が途切れることのないよう関係機関が連携し続けていく必要がある。

関係機関が連携し引きこもりの改善を図ったケース

【 S S W の支援前 】



【 S S W の支援後 】



1 気になる状況

- 児童Aは、小学校入学時から欠席しがちだったが、第3学年からほとんど登校ができなくなった。第5学年になり、教育支援センターに通級するようになったが、長続きしなかった。
- 1学年下のいとこの男児も近隣に住み、同じ状況であることに対する安心感もあり、なかなかこの状況を抜け出せないでいた。
- 基本的に昼夜逆転の生活をしていることから、教育支援センターへの通級が長続きしない状況が続いていた。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 児童Aは、母子家庭の3人兄弟の3番目の小学校第6学年。大変穏やかな性格でまじめで素直である。
- 児童Aは、登校日が少なく、基礎学力が十分に身に付いていないが、教えたことは理解できる。
- 母親は生活保護を受けている。
- 母親は、不登校の状況はよくないと思っているようだが、児童Aの親族に不登校の者が多く、子どもたちの登校（通級）の状況を心配している様子は感じられない。

(2) 学校との情報共通の状況

- 教育支援センターが中心となり、学校と児童Aの状況について随時情報を交流するよう努めている。

3 ケース会議の状況

- S S Wが中心となり、これまでにケース会議を2回開催した。
【出席者】 学校(教頭、学級担任)、教育支援センター指導員(2名)、教育委員会(指導主幹、学校教育アドバイザー、S S W)
【協議内容】 ①児童Aの状況把握
②課題の明確化
③今後の支援策

4 プランニング

- S S Wが家庭訪問を行い、児童Aの状況を把握するとともに、保護者を支援し、教育支援センターへの通級を働きかける。
- 児童Aが教育支援センターに通級した際は、学習を強要せず、児童Aの希望することを行わせる。
- 保護者と教育支援センター指導員が共通認識をもてるよう、家庭訪問や電話連絡などで支援する姿勢を積極的に示していく。
- 学校は、家庭や児童Aの状況を把握することや、学校とのつながりを感じさせる取組を行うが、登校を促すなど無理強いはしない。

【各機関の役割】

- ① 学校
 - ・学級担任が毎週家庭訪問を行い、児童Aと保護者から現在の状況を把握することに努める。
 - ・むやみに登校や通級を促すような言動は慎むようにする。
- ② S S W
 - ・支援計画に基づき、学校と教育支援センターの連携をより深めるようにする。
- ③ 教育支援センター
 - ・S S Wと連携し、保護者を温かく支援し、児童Aが意欲的に通級したくなる環境づくりに努める。
- ④ 子育て支援室
 - ・S S Wと連携し、弟(保育園児)の登園状況と家庭環境の状況を共有する。

5 社会資源の活用状況

- ケース会議で各関係機関の役割を明らかにすることができ、現在は、役割に基づいて支援に当たっている。今後は、それぞれの成果や課題などをS S Wが集約し、所定の期間が過ぎた段階で情報を共有する会議を行う予定である。

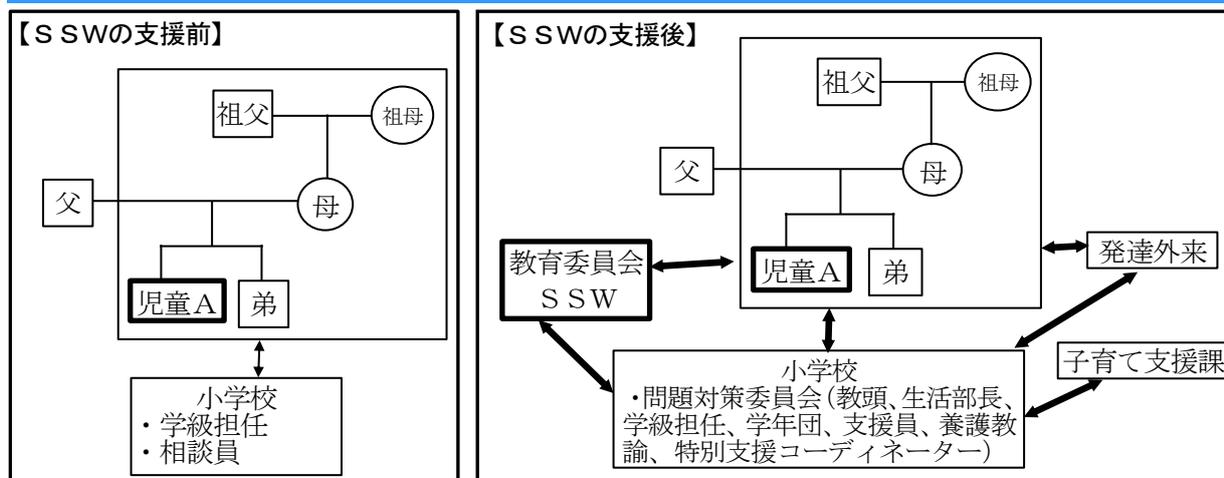
6 当該児童の変容(成果と課題)**<成果>**

- S S Wや教育支援センター指導員の家庭訪問等により、保護者が心を開いて児童Aの将来を考えることができるようになった。
- 通級する日数は少ないが、お楽しみ会のような行事の前後は連続して通級できるようになった。
- 教育支援センター指導員の学習の働きかけに、保護者も児童Aも同意して取り組むことができるようになった。
- 中学校入学から登校できようにする取組を、保護者と連携して進めることができるようになった。

<課題>

- 保護者が、児童Aの不登校を当たり前と感じてしまう家庭環境にあることから、児童Aの自立に向けた保護者への温かく、粘り強い支援をこれからも続ける必要がある。

保護者の協力が得られない不登校児童が学校に復帰したケース



1 気になる状況

- 児童Aは転入前から不登校であり、第3学年の1月に、環境を変え、不登校を改善するため、児童Aの母親、弟とともに母親の実家に引っ越し、当該校へ転入した。
- 児童Aは、転入後、相談室登校をしていたが、登校支援を進めた結果、第4学年4月から教室へ入ることができるようになってきた。
- 児童Aは、第5学年の後半から、学校行事などで学級が慌ただしく、騒然としてくると「過敏」「抑圧感」「悲観的思考」「不定愁訴」などの症状が顕著となり、登校できなくなるという状況が繰り返された。
- 児童Aが第6学年の夏休み頃から、児童Aの父親が、今までの登校支援や教職員、クラスメートとの関わりを強く拒否するようになり、学校は児童Aに対し、登校支援を行えない状況になった。
- 児童Aは、第6学年の夏休み明け頃から、全く登校できなくなった。家族以外の人との交流がなくなり、生活リズムは乱れ、ゲームやネット依存、睡眠障害などの問題が起こった。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 児童Aは、母方の祖父母と母親、弟の5人で生活し、父親は、隣町に単身赴任している。
- 児童Aは、幼少期から嫌なことや苦手なこと、自分の思うようにならないことなどに直面すると、家族に対して癩癩を起こし、叩く、蹴る、物を投げる等の問題行動が習慣化していた。
- 両親や祖父母は、児童Aに対し、成長に必要な発達課題であっても、忍耐強く取り組ませるなどの関わりができない。
- 父親は、児童Aには発達障がいがあると考えられることから、「登校刺激を与えずに本人の登校意欲が高まるまで待ってほしい」、「登校後も教室復帰は望まないのので、卒業まで別室での個別支援をお願いしたい」と申し出ている。

(2) 学校との情報共有の状況

- SSWは、教育委員会から派遣され、児童Aが在籍する小学校の相談室に常駐している。児童Aの母親が直接来室し、SSWへ「幼少期からの我が子の癩癩と引きこもり状態の対応に行き詰まり、自分自身の精神状態も限界にきている」という相談をしてきた。
- SSWは、学校内に設置されている「問題対策委員会」において、支援体制と個別の教育支援計画の修正に向けた協議を推進した。

3 ケース会議の状況

- ケース会議に向けて、SSWは各担当者と事前の打合せ及び資料の作成を行った。
- (構成員) 学 校：問題対策委員会（教頭、生活部長、特別支援学級担任、学年団、支援員、特別支援コーディネーター、養護教諭）
連携機関：教育委員会、医療機関、子育て支援センター
- (協議内容) ①支援修正に至った状況の把握 ②支援課題の明確化 ③支援のプランニング
④支援内容および支援経過の共有と評価 ⑤支援結果の評価と再支援計画立案

4 プランニング

- 保護者の要望を学級担任一人が抱えることのないように、常に「問題対策委員会」が中心となり、学校復帰を目指した効果的な支援に取り組む。
- 児童Aが「安心して学べる人と場」の視点で「相談室登校」「特別支援学級での授業」「子育て支援センターの活用」など、状況に応じて学びの場を提供する。友人との交流や個別の学習支援によって、成功体験を積み重ね、児童Aの自己肯定感を高める。
- 保護者が長年、気にかけている発達障がいの有無について、医療機関（発達外来）への橋渡しを行い、発達障がいの有無を明確にし、学校と家庭の共通理解を図る。
- 母親の困り感に寄り添い、養育の行き詰まりが軽減されるようにカウンセリングに取り組む。

【SSW】

- 保護者の心情を受容し、保護者と支援者をつなぐ。
- 問題対策委員会と連携し、「ケース会議」の開催を推進する。
- 社会資源の活用について、助言や橋渡しを行う。
- 支援を評価し、積極的に有効な支援計画の修正を行う。

【学校】

- 委員長：「ケース会議」の招集、支援の推進、職員会議で支援計画の提案と協力の依頼を行う。
- 学年団・特別支援教育コーディネーター：児童Aの特性を理解し、安全安心を感じられる教室環境の整備と学校全体でのサポート体制など、支援体制を構築、推進する。
- 養護教諭：児童Aの心身の健康状態の把握と維持管理を行う。
- 管理職：教育委員会への報告及び支援への指導と協力を要請する。また、「問題対策委員会」への助言を行う。

5 社会資源の活用状況

- 教育委員会：学校やSSWへの指導助言を行う。
- 医療機関（発達外来）：「発達・心理検査」の実施と保護者への助言を行う。
- SSW：支援体制の構築、医療機関との連携による効果的な登校支援の推進を図る。

6 当該児童の変容（成果と課題）

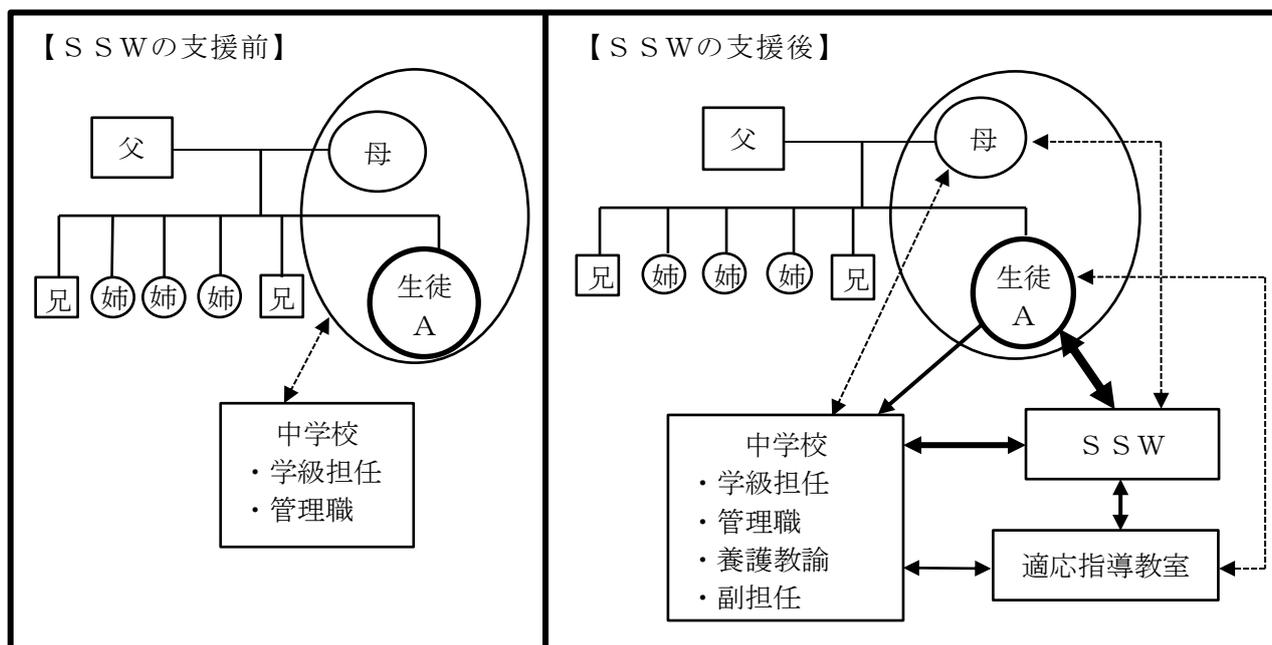
<成果>

- 医療機関からの「発達障がいはない。現在、取り組んでいる登校支援は有効である。」という助言により、保護者は学校の現在の取組を積極的にサポートするようになった。
- 保護者と学校の一貫した登校支援により、児童Aの「過敏」「抑圧感」「悲観的思考」「不定愁訴」も改善し始め、登校できるようになってきた。

<課題>

- 児童Aは、安全を感じられない環境に遭遇すると不登校を再発させる傾向があると考えられることから、今後、児童Aが進学する中学校への引継ぎを丁寧に行い、小学校での支援が継続されるようにする必要がある。

長期不登校生徒に対して、直接支援を中心に対応しているケース



1 気になる状況

- 小学校から不登校が続いているため、学習の遅れや同年代と集団生活を送る経験が不足している。
- 家庭の教育力に欠け、保護者と連絡がとれないことが多く、保護者が対応すべき事柄も子どもまかせになっていることが多い。
- 担任が定期的に家庭訪問を行い、配付物等を渡しながら生徒Aへ登校を促してきたが、生徒Aに会えないことが多かった。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 生徒Aは末っ子であり、兄姉は独立しているため、現在は母親と二人で暮らしている。
- 父母は離婚していないが、父親は別居している。
- 子どもたちへの保護者の関わり方に問題があり、兄姉も不登校であった。
- 母親は仕事をしているため、生徒Aの登校を見送ったり、生徒Aを送迎したりすることができない。
- 給食費や教材費等は納付している。
- 生徒Aは、物作りに興味をもっており、自分で工夫をしながら取り組むことができる。

(2) 学校との情報共有の状況

- 関係機関等と連携を図った対応が必要であり、学校からSSWに支援要請があった。
- SSWは、家庭訪問をしながら生徒Aの安否を確認したり、生徒Aが登校する際は、学校内での関わりについても対応したりした。
- 中学校入学後も登校できないことが多かったため、学校に生徒Aの状況が伝わることは少なく、小学校時の様子や家庭の状況について、SSWから伝えている。

3 ケース会議の状況

- 適宜、校内ケース会議を開催し、生徒Aの状況や今後の対応等について話し合いを行った。
(メンバー：校長、教頭、学級担任、副担任、養護教諭、SSW)
- 学級担任とは定期的に情報交流をしている。
- 支援後には学級担任に支援内容を伝えている。

4 プランニング

- 中学校
 - ・学級担任や副担任が、登校時に生徒Aとコミュニケーションを図るようにする。
 - ・配付物は学校で渡すが、渡せないときは家庭訪問の際に渡す。
 - ・生徒Aが関わることでできる教員を増やすため、養護教諭との関わりを大事にする。
 - ・生徒Aの特性に応じた学習環境を整備する。
- SSW
 - ・週1回、生徒Aへ直接の支援を行う。
 - ・集団での学びを苦手としているため、相談室を中心に関わる。
 - ・保護者への働き掛けが必要だが、連絡が取りづらい状況なので、保護者へのアプローチより生徒Aに力を付けることを考える。
 - ・登校に向けた支援や登校できた際の学習支援等、できることを丁寧に行っていく。
 - ・生徒Aの興味や関心を広げられるように支援する。
- 関係機関
 - ・適応指導教室を紹介する。

5 社会資源の活用状況

- SSWによる支援が週一回と限られることや、集団での学習についていけないことから、適応指導教室を紹介した。
- 生徒Aは、適応指導教室へ通おうとする気持ちを持つことができず、ほとんど通うことができなかった。
- 適応指導教室に通った際は、学習に取り組むこともあるが、菓子作りなど、生徒Aが興味のあることに取り組んだ。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

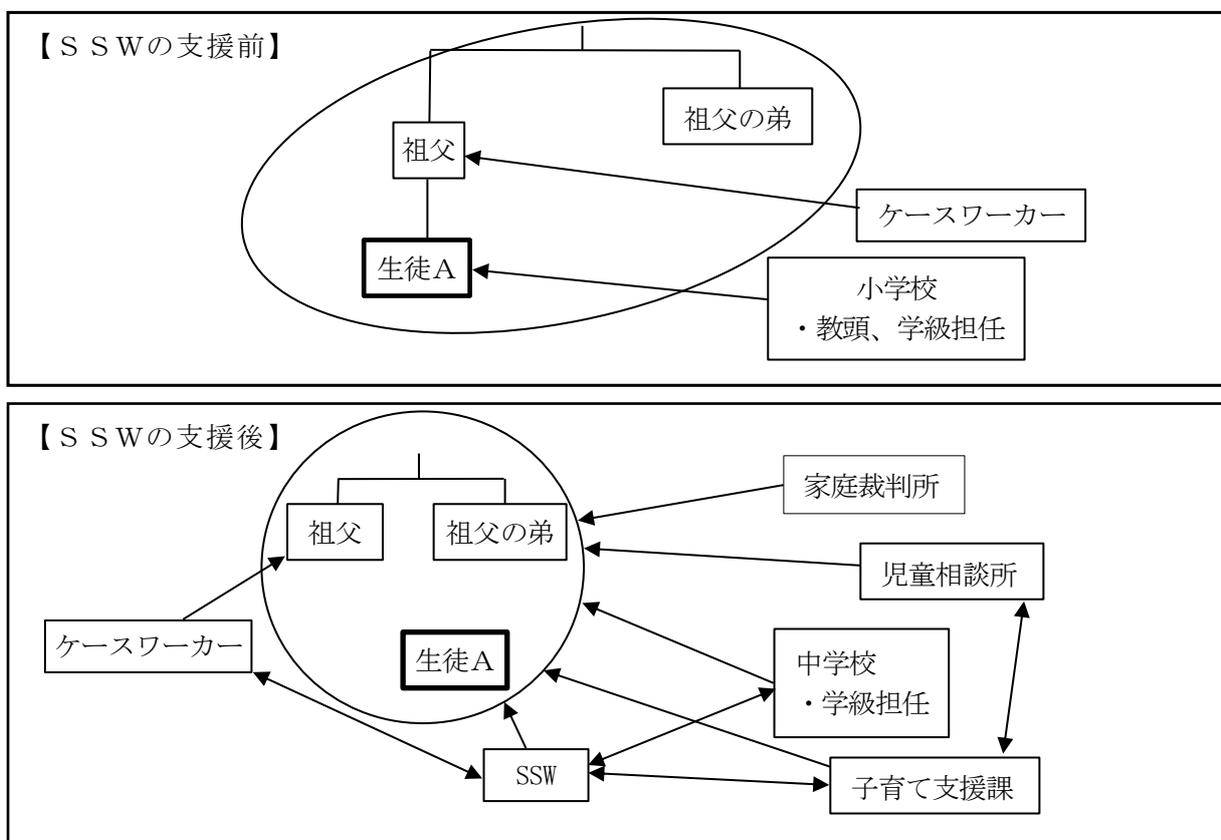
<成果>

- 定期的な支援を継続することにより、登校できる日数が増えてきた。
- 本事案についてSSWが関わったことにより、SSWによる生徒Aに対する直接的な支援だけでなく、SSWと教員が連携を図った効果的な支援をすることができた。
- 大きな行事やSSWの支援日ではない日にも登校することができるようになった。

<課題>

- SSWによる限られた回数での支援を有効に活用し、SSWと教員との連携を深め、今後、生徒Aに自ら学ぼうとする意欲や社会生活を送る上での基本的な力を十分に身に付けさせる必要がある。

不登校生徒の家庭環境と非行行動の改善に取り組んだケース



1 気になる状況

- 小学校第6学年時、家庭のお金を保護者に無断で使用し、ゲーム機やゲームソフトを購入し、その後、ゲームが習慣化し、昼夜が逆転した生活となり、不登校となった。
- 祖父が、ゲームを取り上げると自室に引きこもるようになった。
- 祖父が寡黙であり、養育が不十分であるなど、生徒は成育歴に問題があった。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 生徒Aは現在、中学校第2学年である。
- 生徒Aが2歳時に、父親と母親が他界し、祖父に育てられた。
- 生徒Aが小学校第3学年時に、祖父が脳梗塞を発症し、半身麻痺となったため、祖父の弟が同居することになった。
- 生徒Aは人懐っこく明るいため、学級のムードメーカーである。

(2) 学校との情報共有の状況

- 家庭環境に問題があることを心配した小学校の学級担任が、SSWに相談したことにより関わりをもつようになった。
- SSWは、生徒Aの様子や保護者の対応、家庭訪問で得た情報等を学級担任と情報共有している。

3 ケース会議の状況

- 家庭の状況把握のため、介入した当初にケース会議を開催した。
- 参加者
 - ・ 小学校（教頭、学級担任等）、子育て支援課、民生委員、主任児童委員、祖父の介護支援事業所職員、生活保護のケースワーカー、教育委員会職員
- 内容
 - ・ 各関係機関の関わりを確認するとともに、現状について把握し、情報を共有した。
 - ・ 今後の支援策について検討した。

4 プランニング

- 以前から学校が相談していた子育て支援課と S S W が家庭訪問を行い、祖父と祖父の弟から聞き取りをした（本人との関係づくりのため週 1 回の訪問を継続）。
- 家庭環境に問題が見られるが、祖父と祖父の弟は、生徒 A の不登校の理由をゲームのためとしていた。
- ゲームを取り上げても不登校の解決にならないことを伝え、生徒 A への声かけを増やすように指導するなど、定期的に訪問をしている。
- 学級担任は週に数回家庭訪問をして、生徒 A と話ができるようになった。
- 学級担任と信頼関係が築けているので、関係性を継続するために訪問を続ける。

5 社会資源の活用状況

- S S W がケースワーカーと情報共有し、生徒 A と話ができる大人（ケアマネージャー、アパートの大家等）に声かけをお願いした。
- S S W とケースワーカーが、祖父と相談し、現状の養育環境がよくないことを理解してもらうように努めた。
- 児童相談所と連携を図り、児童相談所とつながりをもつようにした。
- 祖父の弟に、未成年後見人になってもらった。
- 祖父の弟に、公的支援（児童手当や就学援助）の手続きをしてもらった。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

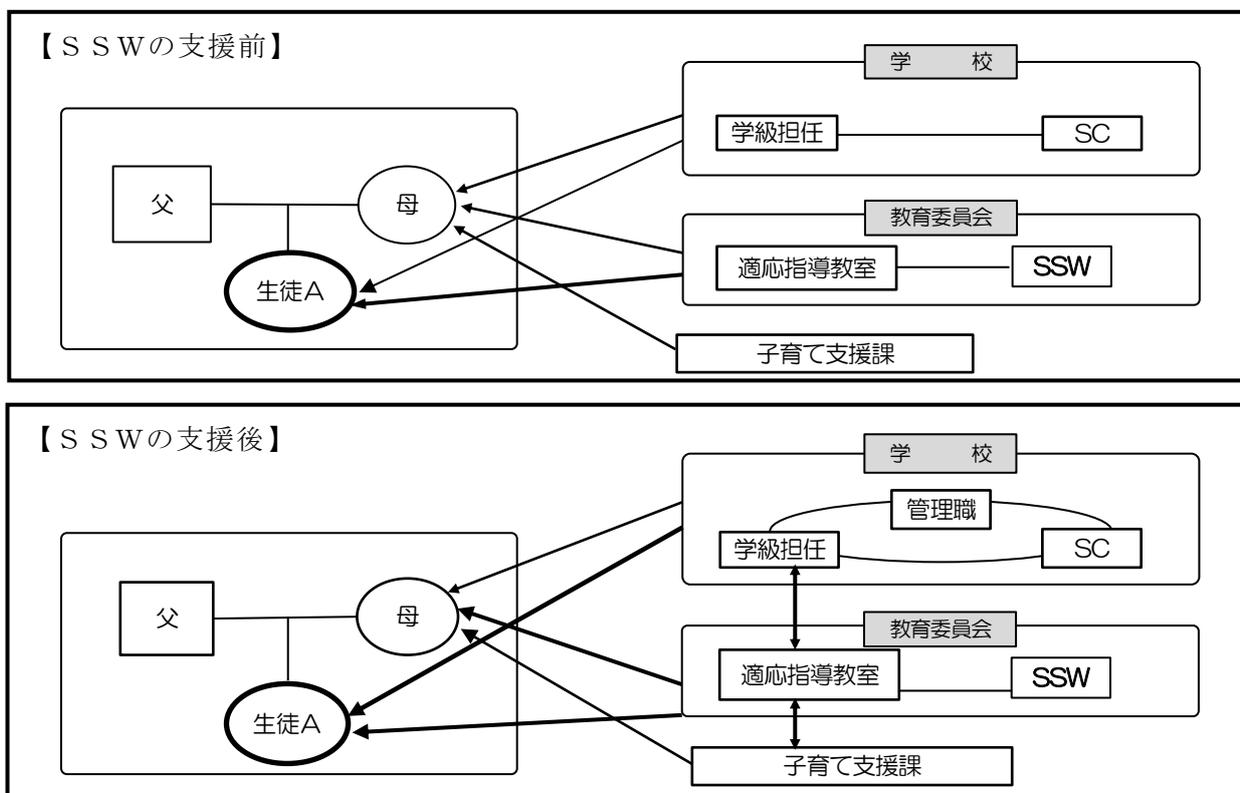
<成果>

- 生徒 A は、これまで食事を取らず、入浴をしないときもあったが、祖父から生徒 A にゲーム機を返したり、小遣いを渡すルールを決めたりするよう、祖父に協力をしてもらった結果、食事のために少しずつ居間に出てくるようになり、小学校卒業前には、ほぼ登校できるようになった。
- 祖父は、祖父だけの養育が生徒 A のためによくないことを理解し、児童相談所で保護する話を進めていたが、祖父の弟が生徒 A を養育することにした結果、生徒 A は中学校入学後、祖父の弟宅で生活するようになり、不登校は解消した。
- 子育て支援課と S S W が、月に 1 回定期訪問し、祖父の弟に助言したり、必要に応じて関係機関と連携を図ったりしながら対応に当たったことにより、生徒 A と信頼関係を築くことができた。

<課題>

- 生徒 A は、祖父の弟宅で生活するようになり、落ち着いて生活していたが、金庫を壊してお金を盗んだり、クレジットカードを使ってインターネットのゲームで課金したりするようになるなどの問題行動が見られるようになった。今後、関係機関等と連携を図り、生徒 A への指導を継続する必要がある。

適応指導教室と学校との連携で保護者の信頼を回復したケース



1 気になる状況

- 生徒Aは、小学校のときから、友人とのトラブルが多かった。
- 生徒Aは、顧問の指導に不満をもち、中学校第1学年の6月から部活動を欠席するようになった。
- 生徒Aは、学級内の友人や上級生とのトラブルがあり、中学校第1学年の6月から、徐々に登校日数が少なくなり、2学期からほぼ登校することができなくなった。
- 母親は、生徒Aの不登校に悩み、SCや子育て支援課の職員、SSWに相談し、生徒Aは、中学校第1学年の9月から適応指導教室に通級するようになった。
- 母親は、中学校第1学年のときの生徒Aへの学校の対応に不満をもち、中学校第1学年の2月と第2学年の5月に来校し、これまでの指導に対する不満を訴えた。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 家族構成は父親、母親、生徒Aの3人家族である。両親はともに働いており、帰宅が夜中になることが多い。
- 生徒Aは、自己主張が強く、自分の非を素直に認めることが苦手なため、友人とトラブルになることが多い。また、SNSによるトラブルも多々見られる。
- 母子ともに似た性格であるため、互いに衝突することが多い。母親は子どもの不登校に悩み、子育て支援課に相談に出向いている。
- 中学校第1学年のときは、母親が生徒Aに対し、学校への登校を強要する場面が多く見られた。毎年、NPO法人主催のキャンプに参加していたが、母親は参加の許可を学校への登校を条件にするようになった。

(2) 学校との情報共有の状況

- 7月と11月に適応指導教室の指導員とSSWが学校を訪問し、適応指導教室での生徒Aの様子や保護者懇談の内容について情報共有を図っている。

【 中学校③ 】

- 中学校第1学年の3学期から、学級担任が適応指導教室を週1回程度、訪問するようになった。
- 中学校第1学年の9月から、母親が学校でカウンセリングを受けるようになり、中2の5月から、生徒Aもカウンセリングを受けるようになった。

3 ケース会議の状況

- 中学校第1学年にケース会議を行うとともに、ケース会議後は、学校とSSWが緊密に連絡を取り合っている。
【参加者】：中学校教頭、学年主任、学級担任、適応指導教室指導員、SSW
【内容】：①生徒Aと母親の状況や意向の共有 ②適応指導教室の考え方と方針の共通理解 ③共通して取り組むことや課題の確認 ④SCや子育て支援課との連携

4 プランニング

- 週1回を基本に、学級担任が適応指導教室を訪問し、生徒Aとの信頼関係の構築に努める。
- 3月に行われる適応指導教室での保護者懇談で、保護者の意向を把握し共通理解を図る。
- 学校は、学校行事等への取組を通して、生徒Aに登校刺激を与え、登校を促す。
- 適応指導教室の様々な活動を通して、生徒Aの自己肯定感を高めるよう指導助言する。
- 学校や適応指導教室、SC、子育て支援課が連携し、情報を共有しながら指導する。
- 各機関の役割
【適応指導教室】
 - ① 生徒A自身が気付いていない能力やよさ、日常の頑張りなどを伝えて、自信をもたせるなど、自己肯定感を高める指導を工夫する。
 - ② 母親との連携を密にし、学校の取組を母親に伝える。
 - ③ 保護者懇談を有効に活用して母親の心情を安定させるとともに、保護者の意向を把握し学校に伝える。
【スクールカウンセラー】
 - ① 生徒Aとの相談機能を高めることで生徒の心情を安定させるとともに、学級担任と連携して登校に対する思いを確認する。
 - ② 母親との面談で、母親の心情を安定させる。
【中学校】
 - ① 週1回を基本とした適応指導教室の訪問を継続して行い、生徒Aとの信頼関係の構築に努めるとともに、学校行事等の取組を利用して効果的な登校刺激を与える。
 - ② 適応指導教室との連携を密にし、生徒Aの細かな変化等を共有し、連携して指導する。
【子育て支援課】
 - ① 母親との面談で母親の心情を安定させるとともに、生徒Aに発達検査を受けさせることについて勧める。
 - ② 生徒Aの希望により面談を行い、悩み等の相談に応じる。
 - ③ 必要に応じてSSWと連携し、情報を共有する。

5 社会資源の活用状況

- SSWが、生徒A及び保護者、教頭、学級担任、SC、子育て支援課が綿密に連絡を取り、情報の共有と対応に努める。
- NPO法人や民生委員児童委員など、適応指導教室への協力者に生徒Aの状況を伝えながら支援を依頼する。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

<成果>

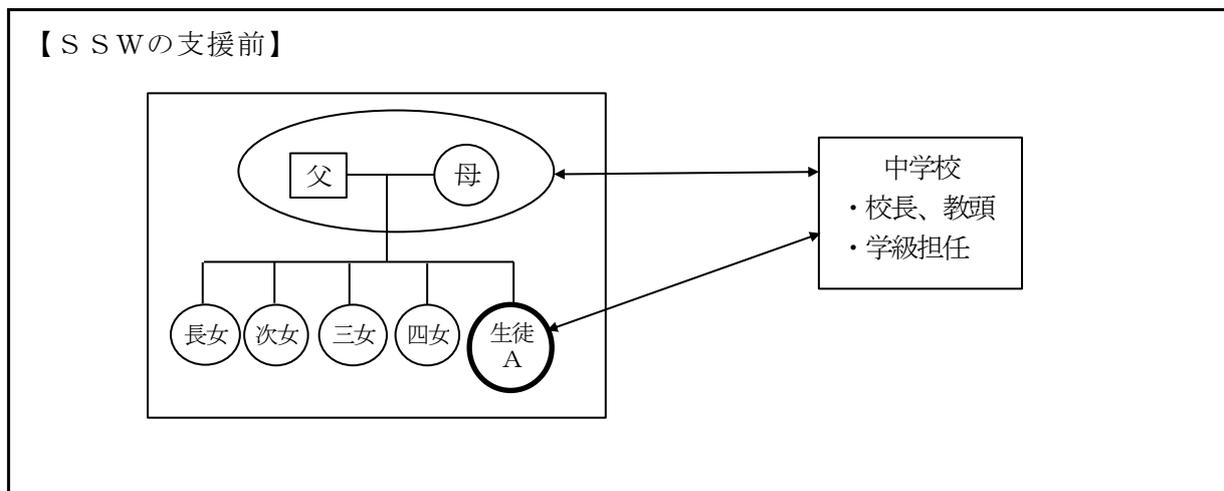
- 生徒Aは、カウンセリングを受けるために、登校することができるようになった。
- 文化祭や修学旅行の取組においては、学級で活動でき、文化祭に参加することができた。
- 保護者の学校に対する不信任も解消され、保護者及び生徒Aが学級担任に信頼を寄せるようになり、信頼関係を構築することができた。

<課題>

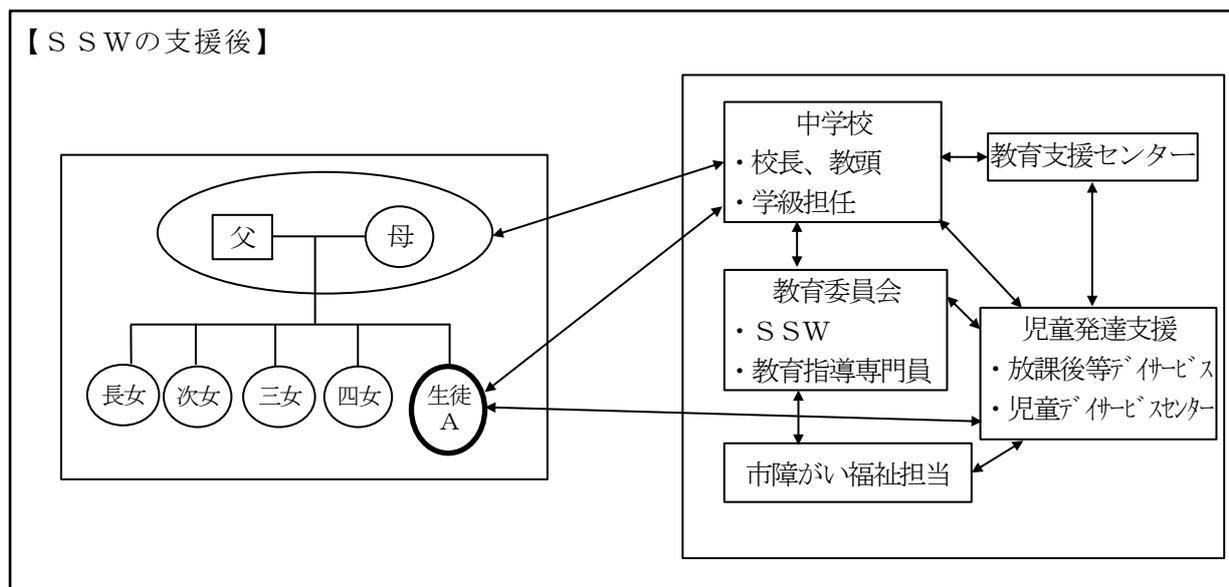
- 学校と適応指導教室が連携し、生徒Aの意向を踏まえた適切な進路指導を行う必要がある。

関係機関が連携し引きこもりの改善を図ったケース

【 S S W の支援前 】



【 S S W の支援後 】



1 気になる状況

- 生徒Aは小学校第6学年時に、学級担任からの指導をストレスと感じるようになり、学級担任に不信感をもち、不登校となった。
- 中学校入学当初は登校していたが、体調不良を理由に登校しなくなり、学級担任が毎朝、家庭訪問を行って登校を促し、週1回程度午後から登校していたが、3学期から登校しなくなった。
- 登校しなくなってからは、他の生徒に出会うことを避けるため、外出することもなくなり「引きこもり」の状態となった。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 家族は両親、4人の姉、本人の7人で暮らしている。
- 生徒Aは先天性の心臓疾患があり、「軽度の精神発達遅滞と自閉症スペクトラム」の診断を受けており、小学校第3学年から特別支援学級に在籍している。

【 中学校④ 】

- 生徒Aは登校することに対して抵抗があり、保護者は「引きこもり」解消のため、学校以外で外出するきっかけをつくることを望んでいたことから、SSWが児童発達支援・放課後等デイサービスの利用を提案したところ、保護者は利用することを承諾した。

(2) 学校との情報共有の状況

- SSWが、家庭訪問で得た生徒Aの家庭での様子や保護者の状況、児童発達支援・放課後等デイサービスにおける様子等について、学校と情報共有を行っている。

3 ケース会議の状況

- 参加者
中学校教頭、学級担任、教育委員会教育指導専門員、SSW、児童発達支援センター、教育支援センター、市障がい福祉担当
- 内容
生徒Aの現状について各関係機関で情報を共有し、「引きこもり」の解消並びに学校復帰に向けた方策の検討

4 プランニング

- SSW
 - ・家庭訪問での保護者との面談により、生徒Aの様子を確認するとともに、そこで得た情報を学校や関係機関へ伝え、協力を要請する。
- 中学校
 - ・学級担任による定期的な家庭訪問を継続し、生徒A及び保護者との信頼関係を構築する。
 - ・児童発達支援・放課後等デイサービスで行う学習課題を準備し、学習意欲を喚起する。
- 児童発達支援・放課後等デイサービス
 - ・生徒Aが、安心して活動でき、自己表現できる「居場所づくり」に努めるとともに、コミュニケーション能力を高める。

5 社会資源の活用状況

- 児童発達支援センター
 - ・保護者との面談において臨床心理士による指導助言を行う。
- 児童発達支援・放課後等デイサービス
 - ・生徒Aと指導員の間でルールを決めて生活し、生徒Aの特性に合わせた指導を行う中で様々な事に取り組む機会をつくる。
 - ・学校と連携し、提供された学習課題を本人のペースに合わせて進める。
- 教育支援センター、市役所障がい福祉担当
 - ・生徒Aの児童発達支援・放課後等デイサービス利用のための手続きや支援計画を作成する。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

<成果>

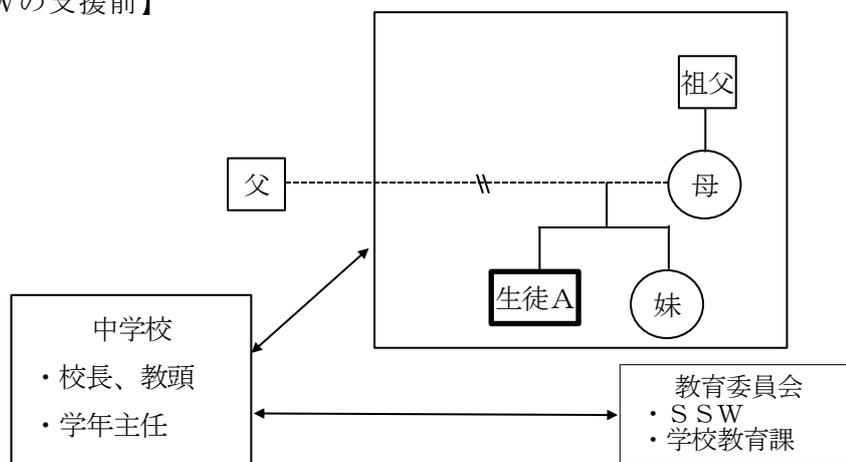
- ケース会議を開催することにより、情報共有だけでなく支援の方向性を確認することができた。
- 児童発達支援・放課後等デイサービスへ通所できるようになり、「引きこもり」状態は解消された。
- 児童発達支援・放課後等デイサービスでは同年代の友達との会話ができるようになり、日常的な挨拶ができるようになった。
- 家庭でも児童発達支援・放課後等デイサービスでの様子を話すようになり、親子の会話が増えた。

<課題>

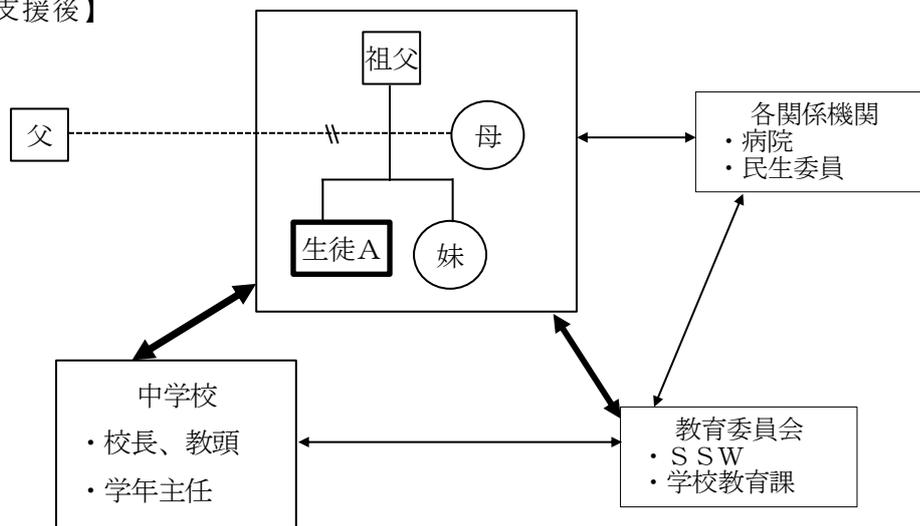
- 今後は、通所回数を増やし、適応指導教室への通級から、学校での個別対応へと適応の場を少しずつ広げて、登校へとつなげていく必要がある。

本人及び保護者と関わる中で不登校の解消に取り組んだケース

【 S S W の支援前 】



【 S S W の支援後 】



1 気になる状況

- 生徒Aは、オンラインゲームに夢中となり、昼夜逆転の生活をしているため、小学校第6学年の3学期から不登校となった。
- 生徒Aは、生育環境に課題があり、家族関係に悩みを抱えていた。

2 アセスメント

(1) 基本的情報

- 家族構成は、母方の祖父、母親、妹、生徒Aの4人家族である。
- 生徒Aは、母親がゲーム機を取り上げると暴れたり、家出をしたりするなどの行動が見られる。
- 生徒Aは、小学校第2学年の時に心理検査を受け、数値上の課題は見られなかった。
- 母親は、仕事があるため生徒Aより先に家を出るため、生徒Aが登校したかどうかを把握できていない。

- 祖父が同居しているが、子どもたちの教育や生活には無関心である。
- 家の中は、乱雑で、ゴミなどが散乱している。

(2) 学校との情報共有の状況

- 学校訪問やケース会議をととして生徒Aの情報の共有化を図っている。

3 ケース会議の状況

- 目的
学級担任とSSWが共に、生徒Aの生活全般に関わる問題を確認し、改善の方法等について検討する。
- 内容
 - ・ 生徒A及び保護者の情報の共有化
 - ・ 生徒A及び保護者への直接的な支援の方法の確認
 - ・ 関係機関の該当生徒及び保護者の支援についてそれぞれの役割の確認

4 プランニング

- 中学校
 - ・ 学級担任を中心に、家庭訪問や面談等を通して、該当生徒及び保護者の生活改善や再登校に向けた意識を高める。
 - ・ 学習面の遅れを取り戻すため、プリント学習や放課後における学習を進める。
 - ・ 当該学年が中心となって、校内の居場所や課題プリント等用意するなどして、登校できたときの学校の支援体制を整える。
- SSW
 - ・ 生徒Aとの面接を通して、日常生活や学習の不安や悩みを聞き、解消に向けて学級担任と連絡調整をしたり、保護者との関わり方を提示したりする。
 - ・ 保護者との面談を通して、子育ての不安や悩みを聞き、解消に向けた相談先の確認や学校との連絡調整を行う。
- 各関係機関
 - ・ 学校からの情報を共有し、学校からの要請に応じて支援できる体制を築く。
 - ・ 各関係機関の専門性をもとに、学校が抱える困難点の解決に向けたアドバイスをを行う。

5 社会資源の活用状況

- 民生委員などの地域の社会資源を活用し、生徒A及び保護者の生活環境の改善を図った。
- 専門機関等への相談を勧め、生徒Aへの支援の充実を図った。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

<成果>

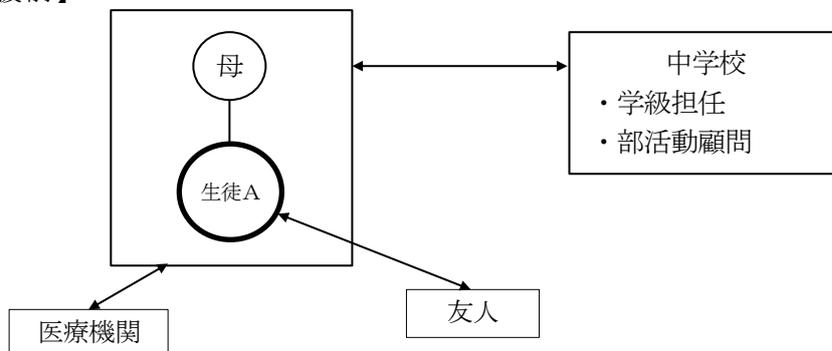
- SSWが生徒Aとの面談を通して、本人が抱える不安や悩み等を共有し、解消に向けた具体的な手立てを提示したことで、本人の意識や行動に変化が見られた。
- 不登校の完全な解消までは至っていないが、登校できる日数が増えており、改善されてきている。
- SSWが示した具体的な手立てを学校や関係機関が共有し、支援に当たることができた。

<課題>

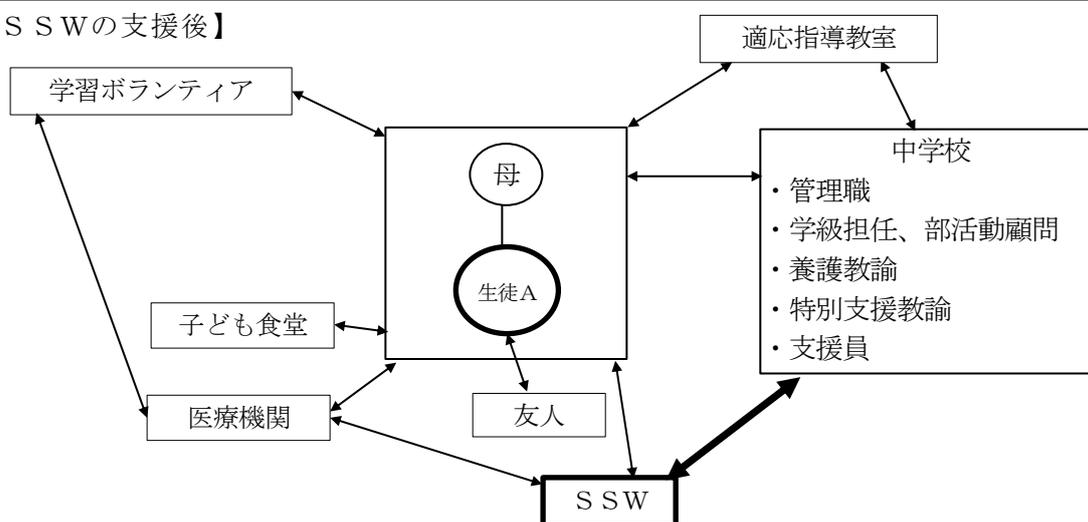
- 生徒Aの家庭が抱える様々な問題点について、今後も関係機関が連携し、対応していく必要がある。

引きこもりの状態から登校できるようになったケース

【 S S W の支援前 】



【 S S W の支援後 】



1 気になる状況

- 生徒Aは、平成30年の秋頃まで小学校に登校していたが、冬季休業明けから不登校傾向になり、学級担任の家庭訪問に応じなくなった。
- 生徒Aは、外出も少なくなり、友人と会う回数が減ってきている。
- 生徒Aの保護者は、小学校の対応に不信感を抱き始めた。
- 生徒Aは、学校に行きたい気持ちと、行きたくない気持ちの葛藤があるが、朝、頭痛や吐き気がして起きることができず、登校できない。
- 生徒Aは、学級内にスクールカーストがあるように感じている。
- 生徒Aは、欠席が多くなると学級に入りにくくなることや、欠席することで成績が悪くなることを心配している。
- 生徒Aは、特定の友人とは校外で交流をもつこともあるが、自分の苦しさを誰も分かってくれないと感じ、学級内においては、孤立感を感じている。
- 体調不良は起立性調節障害であることが分かったが、以前から学級の雰囲気にも馴染めないと感じていたため、学校に登校できなくなってきた。
- 生徒Aは、起立性調節障害の診断を受けた。起立性調節障害について学級の友人や学校に理解をしてもらいたいと母親、生徒Aともに考えていたが、支援体制に関する説明がない状況で、家庭訪問において、学校への登校を促す発言があったため、学校に対して、不信感を抱いている。

2 アセスメント

(1) 基本的情報

【 中学校⑥ 】

- 生徒Aは、母親と二人暮らしである。両親は生徒が幼少の頃に離別している。
- 生徒Aは、起立性調節障害の診断を受けた後、心療内科を受診し、不安・焦燥感、不眠を主訴に薬物療法とカウンセリングを受けている。
- 小学校から少年団に所属し、中学校でも部活動で活躍していた。
- 部活動における友人との交流を深めていた。
- 学習成績は良好である。
- 自分が学級の友人にどう思われているか気になる。
- 登校できなくなってから、集団に属することが苦手になっている。
- 初対面の人には、緊張した様子が見られる。
- 母子関係は良好で、家庭に経済的な問題はない。

3 ケース会議の状況

- 【参加者】 中学校教頭、学級担任、教育委員会、学習支援ボランティア、SC、SSW
- 【回数】 6回
- 【目的】 SSW、学級担任、担当者の取組内容の確認及び現在の状況についての情報共有

4 プランニング

- 学校
 - ・学級担任から、今後、SSWが保護者に関わることについて理解させる。
 - ・適応指導教室との連携を図る。
 - ・当該学年が中心となって、校内の居場所や課題プリント等用意するなどして、登校できたときの学校の支援体制を整える。
- SSW
 - ・生徒Aが抱えている問題と保護者が抱えている問題を明確にする。
 - ・保護者と生徒Aが得意なこと、好きなこと、交友関係などを明らかにし、今後の対応について検討する。
 - ・保護者、生徒Aに学校以外の場所での活動を提案する。
 - ・生徒A自身の目標を、生徒Aに決定させる。
 - ・生徒Aと保護者へ、随時メールでの相談やフォローを行う。
 - ・登校できた時には学年部だけでなく、部活顧問や特別支援学級の教員、支援員等、生徒Aと接点のある教員と積極的に繋げる。
 - ・学校と連携し、登校できた際の対応として、学習支援ボランティアを導入する。

5 社会資源の活用状況

- 保護者、生徒Aに適応指導教室を紹介するなどして、適応指導教室に通う同じ学校の不登校生徒との関わりを促した。
- 生徒Aは小さい子どもへの関わり方が上手であり、仕事を任される事を好むため、かかりつけ医で行われている子ども食堂の運営ボランティアへの参加を促した。
- 生徒Aの登校日に学習支援のボランティアに来校してもらうこととした。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

<成果>

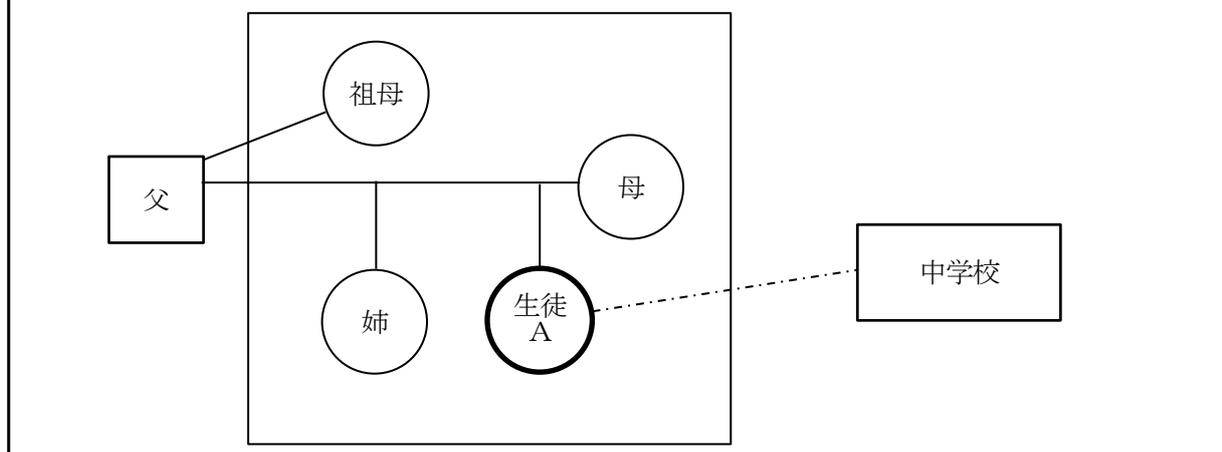
- 不登校が続き、ひきこもりの状態であったが、メールによるコミュニケーションを続けたことで初回の面談に繋げることができた。
- 教育的立場ではないSSWの立場で、生徒Aと少しずつ信頼関係を築くことができた。
- 当該学年以外の教員や支援員からのサポートが大変効果的であり、生徒Aの得意なこと、安心できる教員との交流を広げ、登校ができるようになった。
- 起立性調節障害で登校ができなかった卒業生や、不登校の同級生、特別支援学級の生徒と交流をもち、孤立感が薄れてきている。
- 成績が著しく下がり、落ち込むことがあったが、養護教諭やSSWの助言から自分の体調を考え、進路を変更するとともに、自分の就きたい職業や将来像が明確になってきた。

<課題>

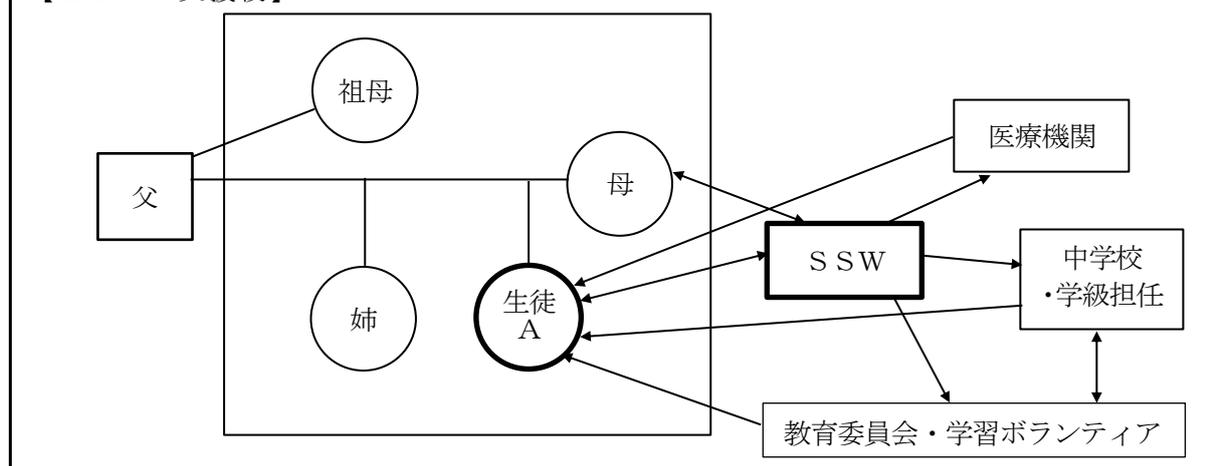
- 学年によって、集団が苦手な生徒や不登校の状態から回復傾向の生徒の学校での居場所がないことから、学校として統一した不登校の生徒へ対応する必要がある。
- 生徒Aへの対応について、担当者が個々に動くことが多かったことから、教職員全体で共有するとともに、生徒指導部やコーディネーターとの連携を一層強化する必要がある。
- 進学がゴールではないことから、中学校卒業、高校に入学してからも継続的に支援をする必要がある。

地域の資源を活用し、不登校生徒の登校への意欲を高めたケース

【SSWの支援前】



【SSWの支援後】



1 気になる状況

- 生徒Aは、部活動におけるトラブルを原因に中学校第1学年の夏から、不登校になった。
- 生徒Aは、同じ部活動の先輩や顧問の教員等、学校関係者に会うことを強く拒否している。
- 生徒Aは、幼少期から癇癪を起すことが多かったが、幼稚園、小学校では目立ったトラブルはなかった。
- 生徒Aは、幼少期から家庭ではよく話すが、家族以外の人に自分の気持ちを表現するのは苦手である。
- 生徒Aは、対人関係については、受容的な態度であり、友人関係などにトラブルはなく、少数の仲のよい友人がいる。
- 生徒Aに学習の遅れはない。
- 生徒Aは、食生活は安定しているが、睡眠時間などの生活リズムが安定していない。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 父親は単身赴任中のため、母親、姉、父方の祖母の4人で暮らしており、経済的に安定している。
- 両親は、生徒Aの状況を理解し、不登校の改善を図ろうとしている。

(2) 学校との情報共有の状況

- 生徒Aは、第1学年の3学期に、SSWと面談を行った。

3 ケース会議の状況

(1) 校内におけるケース会議

- 参加者
 - ・学校管理職、学級担任、学年主任、特別支援教育コーディネーター
- ねらい
 - ・長期目標として登校に向けてストレスのコントロールができること、短期目標として気持ちを言語化することを設定し、支援内容の検討をする。
 - ・長期的な目標をもたせ、学校への登校を促す方法を検討する。
 - ・学習に係る支援を検討する。

(2) 関係機関とのケース会議

- 参加者
 - ・学校管理職、町教育委員会、学習ボランティア
- ねらい
 - ・個別学習の内容を検討し、定期的に生徒Aの学習への取組についての状況を把握する。

4 プランニング

- 学校
 - ・学級担任による定期的な家庭訪問を行う。
 - ・不登校の期間中の学習に遅れが生じないよう、学校外での学習支援を行う。
 - ・生徒Aが自分の気持ちを言語化して表現できるよう、支援を行う。
 - ・生徒Aがストレスをコントロールできるよう、支援を行う。
- SSW
 - ・生徒Aの状況の把握のため、医療機関の受診を進める。
 - ・生徒Aにとって登校することが、短期的な目標でないことを学校に確認し、生徒Aと信頼関係構築に向けたSSWによる定期的な家庭訪問を実施する。

5 社会資源の活用状況

- 学習の遅れに対応するため、学習ボランティアを活用した学習の支援を行う。
- 生徒Aの状況の把握のため、医療機関を活用する。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

<成果>

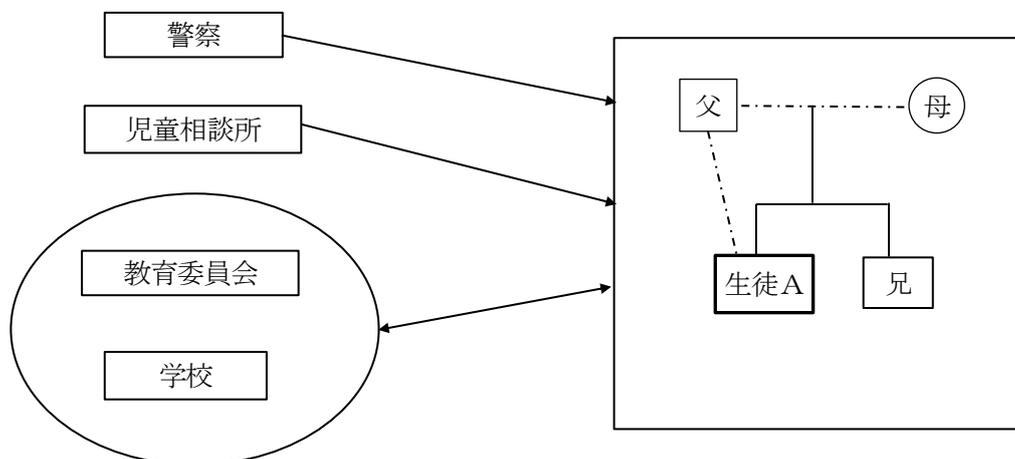
- 生徒Aは、進路実現という学校へ登校する目的を明確にしたことにより、登校する意欲が高まった。
- 母親は、SSWとの複数回の面談の実施により、生徒Aの困り感に目を向け、長期的な視点で、登校復帰を捉えることができるようになった。
- 生徒Aは、SSWによる定期的な面談により、学級担任やSSWと会うことへの抵抗感を解消することができた。
- 母親は、子育ての見通しがもてず、不安を抱えていたが、SSWから通信制の高校などの説明会の情報提供を受け、参加したことにより、不安が解消された。

<課題>

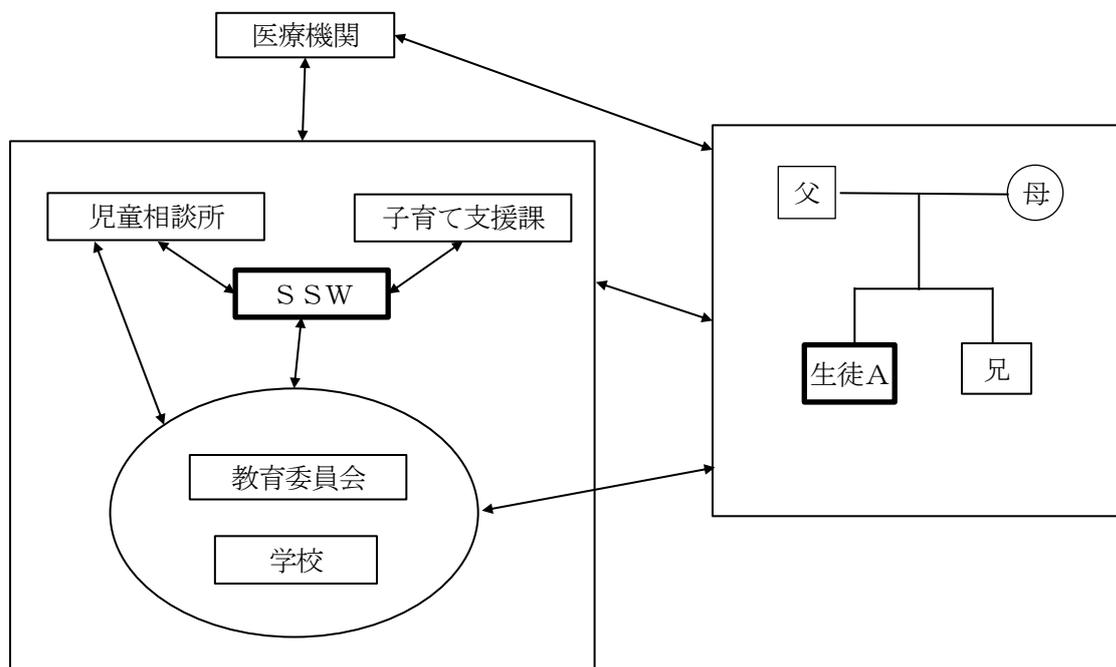
- 本ケースにおいては、SSWのみが面談を行い、アセスメントを行ってきたが、複数の視点からアセスメントができるよう、SCなどを活用する必要がある。

関係機関との連携により、不登校の解決に向けた支援を行ったケース

【 S S Wの支援前】



【 S S Wの支援後】



1 気になる状況

- 生徒Aは、小学校第5学年から不登校傾向となり、放課後に登校することが多くなった。
- 生徒Aは、小学校第6学年時、家庭で刃物を持って暴れ、警察、児童相談所に一時保護された。
- 生徒Aの家庭内暴力の発生後に行われたケース会議（警察、児童相談所等含む）で生徒Aの家庭内暴力について、緊急性はなく経過観察という判断となった。

【 中学校⑧ 】

- 生徒Aは、夜遅くまでゲームに熱中し、生活リズムが不規則になっている。
- 一時保護の後、父親は暴力的なかかわりをやめ、生徒Aの家庭内暴力は、その後、起きていない。小学校においても暴力的な行為は見られなかった。
- 生徒Aは、中学校入学後はほとんど登校できていないことから、学習の遅れを心配している。
- 生徒Aは、中学校入学後もゲームに依存し、無断で高額な課金をすることもあった。
- 生徒Aは、学習面での理解力は高いが不登校による学習の遅れが見られる。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 生徒Aは、父親、母親、兄の4人暮らしである。
- 生徒Aは、学校行事には参加していたが、友人とは疎遠になった。
- 生徒Aの暴力的な行動の背景には、父親の暴力的なかかわりの影響がある。
- 生徒Aは、父親と疎遠であり、母親には依存する傾向があった。
- 父親は、直情的で生徒Aに暴力を振るうことがあった。母親は、精神的に不安定で通院をしている。
- 夫婦間での意思疎通は十分ではなく、高校生の兄も家庭の状況に不安を感じている。
- 事故発生後、父親は、生徒Aに対し直接関わらないようになった。
- 家の中の状況は、煩雑で片付いておらず、食生活も偏っている傾向があり、家庭での教育は期待できない。

3 ケース会議の状況

- 参加者
 - ・ S S W、教育委員会、子育て支援課、児童相談所、学校
- 内容
 - ・ 取組内容の確認及び現在の状況についての情報共有を図った。

4 プランニング

- 教育相談を実施し、家庭の状況把握を行う。
- 関係機関が連携し、医療機関への受診等、ゲーム依存を解消するための支援を行う。
- 生徒Aと家族との関係改善等、家庭環境（父親、母親の状況等含む）の変化を促す支援を行う。

5 社会資源の活用状況

- ゲーム依存等、不登校の解消に向けた支援のため、医療機関と連携した支援を行う。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

<成果>

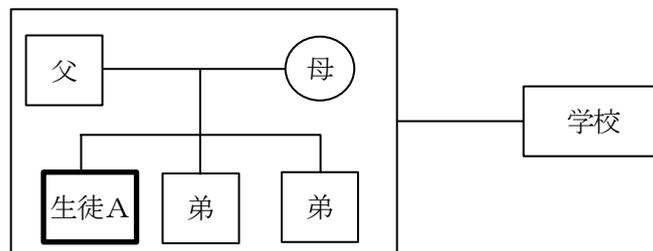
- S S Wが不登校の要因を分析し、分析に基づいてケース会議を開催したことにより、生徒Aの困り感に寄り添った支援を行うことができた。
- 家庭環境の改善のために、S S Wが中心となり、関係機関が連携した支援の体制をつくることができた。

<課題>

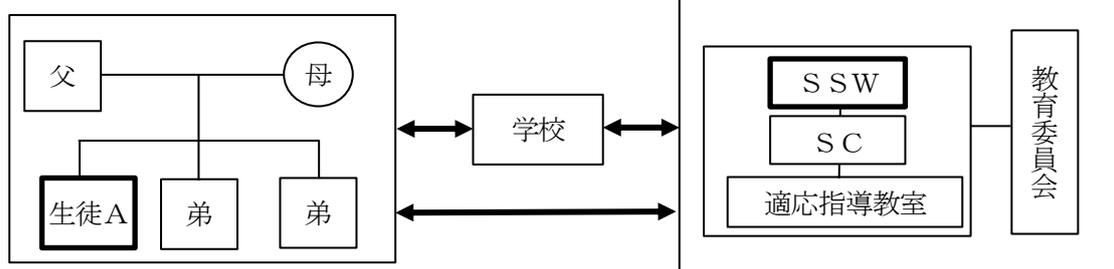
- 不登校の状態から、生徒Aの自立を促していくため、関係機関が連携を図り継続的な支援が必要である。

環境改善を行い、適応指導教室への登校ができるようになったケース

【 S S Wの支援前】



【 S S Wの支援後】



1 気になる状況

- 生徒Aは、中学校入学後、6月頃から休みがちの傾向にあり、2学期からは不登校になった。
- 生徒Aは、学校行事や部活動における不本意な出来事があってから、学級担任、部活動顧問及び同級生との関係が悪化した。
- 生徒Aは、自己肯定感が低いため、登校の意欲があるものの、当日の朝には、発熱や頭痛の症状を訴え、不登校となった。
- 生徒Aは、登校した際、同級生の友達と会うことに強い抵抗を示している。
- 母親は、生徒Aにどのように登校を促すとよいか困り感を抱えていた。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 生徒Aは、母親の登校を促す言動に対し反論するようになり、母親は対応に苦慮している。
- 母親は、生徒Aに対して過干渉な部分があり、そのストレスから生徒Aは弟二人に対して強く当たる傾向がある。
- 父親は、生徒Aに対し、休日にスポーツを一緒に行うなど関わりをもっているが、仕事が忙しいため、日常的にコミュニケーションが図られないことから、生徒Aはストレスを感じている。

(2) 学校との情報共有の状況

- 生徒Aが不登校になってから、SSWが学校の「不登校対策委員会」の職員と連携を図り、家庭に対してSSWとの連携について提案した。
- 保護者の理解を得た上で、面談を実施し、今後の方策について確認した。
- 生徒Aは、週に1日、プリント等を受け取りに登校することから、その日に合わせて、SSWやSCが学校を訪れ、生徒A及び保護者と面談を行った。

3 ケース会議の状況

- 構成員：教頭、学級担任、養護教諭、学年所属教諭、SSW、SC
- 内容：生徒A及び家庭の状況について把握し、今後の方向性について協議した。

4 プランニング

- 学校
 - ・生徒Aが、適応指導教室で安心して活動できるよう、学校にプリントを取りに来た際、学校の情報を提供したりするなど、登校に向けて興味をもつことができるように働き掛けを行う。
 - ・適応指導教室と連携を図り、生徒Aの気持ちの寄り添いながら、安心できる環境を整備し、学習や生活について学級担任及び副担任と連携して具体的方策を考える。
 - ・学級担任が、生徒Aと話し合いながら、学習計画を作成し、教室での活動ができるように支援する。
- 適応指導教室
 - ・生徒Aが、適応指導教室を活用できるよう、生徒A及び保護者に対して、適応指導教室に興味をもてるように働き掛けを行う。
- SSW
 - ・SSWが週1回、生徒Aと面談を行い、生徒Aが抱える不安や悩みを軽減するよう支援する。
- SC
 - ・SCが、生徒A及び母親と定期的に面談を行い、生徒Aが関わる悩みや不安について情報収集するとともに、母親に対して、情報提供を行い、生徒Aと母親の関係性を安定させるよう支援する。

5 社会資源の活用状況

- 適応指導教室
 - ・生徒Aが、学校に登校できないときは、生徒Aが適応指導教室に通所し、適応指導教室の指導員や通所する生徒と活動することができるよう適応指導教室と連携を図った。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

<成果>

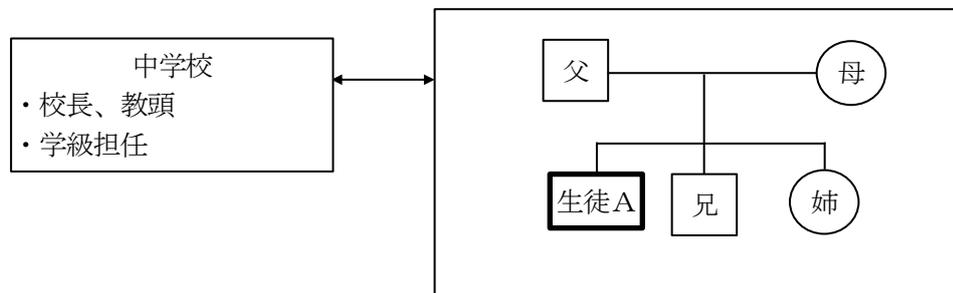
- 生徒Aは、現在、週に1回登校し、週に1～2回適応指導教室に通所することができるようになった。
- 生徒Aは、父親と母親に対し、将来の夢を話すなど、意欲的な姿が見受けられるようになるとともに、運動に取り組むようになった。
- 不登校期間中は、昼夜が逆転していたが、適応指導教室に通所するようになってから、生活リズムが改善された。

<課題>

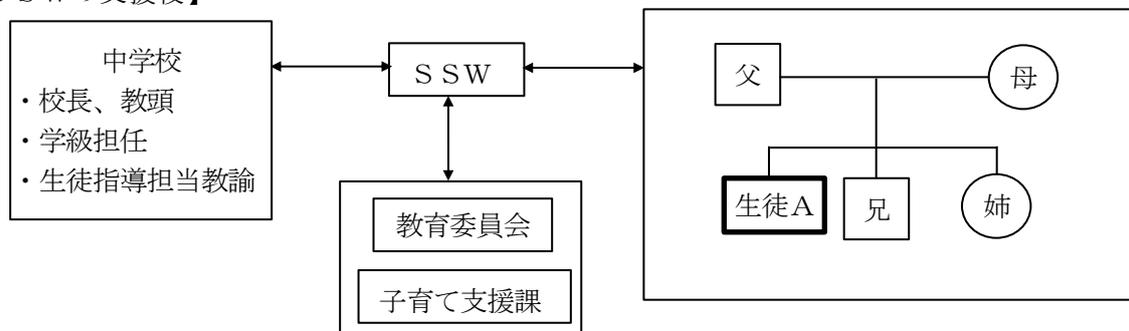
- 今後は、適応指導教室に通所した際、職員や通所する生徒との関係性を育む活動の工夫が必要である。
- SSWとの面談の際に、母親も同席していることから、今後は、生徒Aの不安や悩みについて情報収集するため、個別で面談が行えるよう、信頼関係の構築に努める必要がある。

S S Wが学校と家庭を繋ぐことにより不登校の改善を図ったケース

【 S S Wの支援前】



【 S S Wの支援後】



1 気になる状況

- 生徒Aは、1学期当初から、体調不良を訴え学校を休みがちになり、不登校となった。
- 生徒Aは、キャンプ等の学校行事には積極的に参加することができるが、通常の学校への登校は渋る傾向がある。
- 学習の機会の場を、学校以外に求めている状況にある。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 生徒Aは、父親、母親、姉、兄の5人家族である。
- 生徒Aと保護者の関係は良好である。
- 1学期は体調不良を理由に、長期間の欠席が続いた。
- 生徒Aに、知的、精神的な問題は見られない。

(2) 学校との情報共有の状況

- 学級担任だけでなく、S S Wが家庭に入り長期にわたり接することで、保護者とともに生徒Aへの対応策を協議していった。
- S S Wが保護者と面談を行い、把握した情報について学校に連絡し、情報共有を図っている。
- S S Wが、生徒Aの登校支援に向けて学校以外の学習の場を提供できるよう検討している。

3 ケース会議の状況

- 第1回
 - ・ 構成員：校長、教頭、生徒指導担当教諭、学級担任、SSW、教育指導幹
 - ・ 内容：生徒Aが不登校気味に至った経緯や現状、課題の情報共有及び今後の対応に係る協議
- 第2回
 - ・ 構成員：教頭、学級担任、SSW、教育指導幹、母親
 - ・ 内容：母親の意向確認、登校に向けた環境整備及び校内支援体制の検討
- 第3回
 - ・ 構成員：教頭、学級担任、SSW、教育指導幹、子育て支援課、保護者（母）
 - ・ 内容：本人との面談を通しての今後の支援体制の検討

4 プランニング

- 学校
 - ・ 生徒A及び母親との面談を定期的実施し、生徒A及び母親の思いや悩みを把握するとともに、信頼関係を構築し、不安の解消に努める。
 - ・ 生徒Aが、安心して学校に登校できるよう、SSWと情報共有を図るとともに、生徒Aの気持ちに寄り添いながら、安心して学習できる環境を整備し、学習や生活について学級担任及び副担任が具体的な方策を考える。
- SSW
 - ・ 生徒Aは、学校以外での学習環境を求めていることから、教育委員会等と連携を図りながら、生徒Aが安心して学ぶことのできる環境づくりに努める。
 - ・ 家庭訪問により家族との信頼関係構築に努め、保護者の協力を得ながら、学校の受入体制を整える。

5 社会資源の活用状況

- SSWは、ケース会議において生徒の意向を情報共有し、必要に応じて各関係機関の助言を受けながら着実に進めていった。
- 子育て支援課から、生徒Aの生育歴について情報提供を受けるとともに、SSWがもっている情報を共有するようにする。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

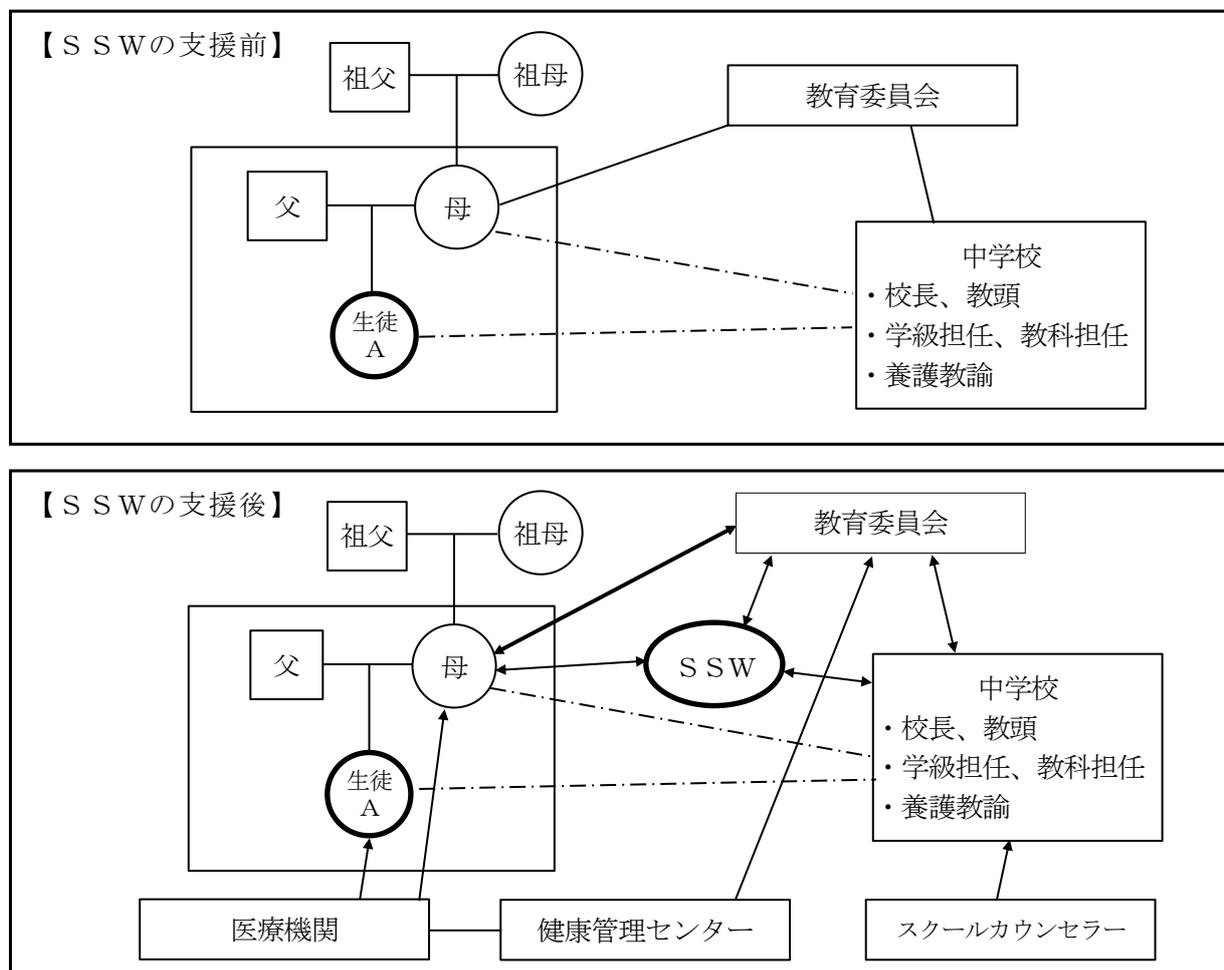
<成果>

- SSWが定期的に生徒Aと面談を行い、不安や悩みに寄り添ったことにより、学校に対する安心と信頼を取り戻し、2学期始めから登校を開始することができた。
- 夏休み中には、父の仕事の手伝いをするなど、家族との関係は良好である。
- 学校は、生徒Aが登校復帰できた際、クラスメイトに対する指導を行っていたため、生徒Aは、不安を感じることなく学級で安心して過ごすことができた。

<課題>

- 今後は、生徒Aの状況を全教職員で共有し、生徒Aが設定した目標を達成することにより、自己肯定感を高めることができるように支援する必要がある。
- 引き続き、学校及びSSWは生徒Aに関する小さな変化を把握し、情報共有するとともに、関係機関と連携し、適切に対応することが必要である。

学校と不登校生徒を抱える家庭との関係改善に向けた支援を行ったケース



1 気になる状況

- 生徒Aは、中学校第2学年の夏から不登校となった。眉毛やまつ毛を抜いたり、鉛筆を手首に刺したりといった自傷行為がみられた。
- 母親からの学校に対する一方的な要求が、毎日のようにある。また、母親は生徒Aに対しても叱責することがたびたびあり、生徒Aの精神面・体調面への影響が心配されているが、母親は学校の話聞き入れないため、生徒Aへの直接の働きかけが困難である。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 父、母、本人（中3女子）の3人家族である。
- 生徒Aに知的・精神的な問題は見られない。
- 生徒Aに対する母親の介入が非常に強く、母親の精神状態が不安定である。
- 不登校となってからは、学級担任が母親に対し電話や家庭訪問を行うなどして毎日のように対応に当たっている。内容は、母親の様々な愚痴を学級担任が一方的に聞くことが多い。
- 母親は、学校行事や生徒間トラブルにおける学校の対応に不信感を抱いている。学級担任だけでなく、教科担任や管理職も不満の対象となっている。

【 中学校⑩ 】

- 父親も学校に対して不満を言うことがあるが、生徒Aとの関係性は悪くなく、学校とも向き合って話をしてくれる。
- 母親は、学校の対応について教育委員会へ相談に来ている。
- 祖母は生徒Aの理解者で、生徒Aは母親に怒られたときに祖母のところへ避難することがある。

(2) 学校との情報共有の状況

- 学校での事案や家庭とのやり取りの結果について、校長、学級担任、教育委員会職員及びSSWが適宜情報共有を行った。
- SSWは、母親と面談を実施し、面談の結果について学校及び教育委員会職員と情報共有を行った。また、生徒Aと母親への接し方について、学校は面談結果を踏まえて福祉的な視点から助言を頂いた。

3 ケース会議の状況

- 出席者：SSW、校長、教頭、担任教諭、養護教諭、教育委員会職員
- 内容：学校からの経過報告、SSWからの面談の結果報告と学校への助言、見立てと今後の対応方針のすり合わせ

4 プランニング

- SSW
 - ・必要に応じて生徒A及び保護者との面談を行い、第三者的な立場で家庭のサポートを行う。
 - ・生徒Aに限らず、生徒との接し方について学級担任に助言を行う。
 - ・学校に対して自傷行為のある生徒の対応に関する研修を実施する。
- 学校
 - ・生徒Aが抱える悩みを受け止め、心のケアを行う。
 - ・母親と毎日電話を行うことが、母親の精神的な安定につながる事が考えられるが、それが生徒Aに与える影響と、学級担任の負担を校内で共有し、対応を確認する。
 - ・学級担任とスクールカウンセラーによる面談を実施し、精神的な負担の軽減に努める。
- その他
 - ・保健師や医療機関の活用を勧めるなどして、母親の精神面のケアに努める。
 - ・母親から生徒Aへの暴力があることから、健康管理センターへの相談や児童相談所への通告についても検討する。

5 社会資源の活用状況

- スクールカウンセラー
 - ・学級担任に対するカウンセリング
- 健康管理センター
 - ・母親の精神面のケアに関する相談
 - ・乳幼児期健康診断等の発育に関する情報提供依頼
- 医療機関

6 当該生徒の変容（成果と課題）

<成果>

- 生徒Aは登校を再開し、他の生徒とも交流できており、明るく学校生活を送っている。
- 生徒Aと母親の特性を教職員全体で共有し、接し方についての共通認識を図った。
- 自傷行為をする生徒への接し方について、教職員全体で認識を深めることができた。

<課題>

- 母親は、精神的に不安定になると自傷行為をしたり、暴力を振るったりすることがあることから、家庭の状況を注意深く見守る必要がある。